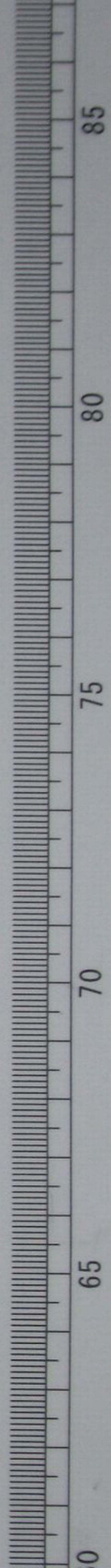


白兄等 下

特 別  
14  
3157  
4(3)



14  
3157  
4(32)



随録紀行

甲戌仲秋

未母もくまの乃金ちりよの月 晋子  
こむのも一色の月 光るつとね  
けも女もつとねつとねつとね  
つとねつとねつとねつとねつとね  
輪もつとねつとねつとねつとね  
心定ちりよ遠おあつとねつとね  
つとねつとねつとねつとねつとね

雨に旅りをはらひていふに  
男をばらひていふに  
あはれにけり

九月六日  
江をさへり  
舟をり  
結柳の吹草  
そ途をみら  
千秋の秋のせ  
岩翁  
来く  
六郎のつら

草まろく  
縮干繩の  
横凡

新根崎

杉の上  
村松  
晋子  
秋のそ  
いふ

三鴻の  
重陽

門酒  
多子  
岩翁  
尺草  
亀翁

原回頭

船音のしるしをきき、さうをさるる士下凡 音子  
つとむと常 雪も面や 水乃色 きる

つとむ川渡航

不たや 笠赤蜻蛉のわらを 括ル

清見

あつたふ乃塩をきき 萩のさ 岩る  
ほろのほろも 舟のさみりい 尺草  
志つこい

舟子をよみわらう同 山脈の 尺中

つとむ山

神のさくさく 鳥かや 消ん 暮れる 中  
少の社の襦も ころころ 音 括ル  
所所柿をきき ころころの山 尺中  
うしろの神も 餅も ころころの山 音子

佐世中山

草鞋を 推さるる 中 括ル  
赤松を ころころの山 尺中

た役のみみ察とくこ小舟の山 晉子

十二日午何より新築の入

森ヨリ之くく 犬居 新築

社より也息杖ももる松の尊 松翁

あこくく一に廉退よ小を子蟻はもあ

蝶の葉と呉持くる山あふふ尺中

合羽着く廉とけくるや新築の晋子

四十八歳とらみらる名のこくくは

いそくともいあさく八十余歳と

水乃敷やあひ谷は谷の島あつる 尺中  
せまきい戸垢離場へ下る岩傳 換几

新築禪定下山の傳

あしれあしくし所紀の上包こすあ

かきく杖を投するありは晋子

を各川より毛籠へ下るや

山風やあそはくくかんふ川 岩翁

水は流瀉巻くるやらくみ系 換几

大く二切所といふあさくく山高し

鳥不巢<sup>ク</sup>水清魚不住

志ののりて耳ありしりて七ッ釜 松島

二役川 推河脇の所社を切所也

折擢と一短は日より濁の色 音子

阿戸川にけり舟はさし濤立 中島

かどま舟にけりすあし

我笠や膝くませしるあはる 尺草

十ら也 濱松め

内玄園家をもつあやとと互 十一

つもれ月魚をるもん翁とつぎ 松島

十らね出る乃珍やあけのる 岩翁

ほ乃く味方より原を一目りな 尺中

いしあしをるをあし

阿の月むやとれく江戸の産 音子

熱田奉幣

芭蕉なる甲子の始りくハ社大ニ

破を築比をくふはあし

こころをばりて小社の魂を

志を——にまへにむかひて  
志をよきものにまへにむかひて  
志をよきものにまへにむかひて  
志をよきものにまへにむかひて  
志をよきものにまへにむかひて

文——と縁空の軒へ  
文——と縁空の軒へ  
文——と縁空の軒へ  
文——と縁空の軒へ  
文——と縁空の軒へ

津島生天

縁乃稻浪五岳とのを守とるなる

十六日くひあふく

は魚々々々の片<sup>サイ</sup>ういせ乃く  
大魚うくくくくくくく  
大魚うくくくくくくく  
大魚うくくくくくくく  
大魚うくくくくくくく

伊勢乃や往來の思 縁う新 松翁  
世の世や女の縁と伊せう  
いせ新乃新の自さうめ 氣張童 尺中

白下

とて川より

むらさきよ祭主の輿を送りしもの音子

お宮 近くおまわすこと

日と風と古殿と雪の残り 同

新葉の春流りしり白石 岩翁

つらなるのわづらひし子等館 尺中

唇の色こそ寒く宮のこころを 龜翁

能く御依りてくこころを 松翁

内宮 浮名の属とてくこころを

さる立十鈴川より遠くおねえ

乃の秋や赤子もまいる若狭山 音子

すいあるあの秋おれり 横乃礼 横凡

廿日 於福井若兵衛大夫御師家

御神樂 謹上再拜

神の秋七午よりしものと神子 岩翁

四身れあゆむ気いなりしものと蟹 亀翁

秋のしものと是より露の色 尺中

秋のあまのしものと山色 横凡

白下

七



烏帽子の秋の洞や少ゆつと 松る  
たぐや小刺をくくく菊のむ 音子

廿一日 二見 秋意

秋をきるんゆ垢新ら齒の葉 岩る  
ひやくりにゆつゆ次たや石と岩 音子  
岩のよくとけぬる室一花為 音子  
ゆらりや誓の力を于ん半島 松る  
秋のゆゆを浴<sup>トヒ</sup>きは一おこ 松る  
葉の子と一<sup>フヨキ</sup>遊かけり音の梅 尺中

師所の家子あおいとつく

濱花<sup>ト</sup>と一はくまこまん群心 岩る  
み花<sup>ト</sup>一秋意の栢とまれく 音子  
真志<sup>ト</sup>のゆのゆく落糸のさ 音子  
ゆ<sup>ト</sup>切とみ花つとくあふゆの山 松る

宮河の上の酒送りせしる

さうえぬ書く柳のさく一 岩翁  
は花をさくさくさくさくさく  
根を石と一是れ河原の井菊は 松る

きまぬと一花あふはりの母菊は 音子  
角石を拾ひのじ色 野菊は 尺艸  
廿三日伊勢ヨリ長谷嶺へ出ぬ田丸ヨリ  
拾物とてさう山嶮道ヲ越ス所京時  
と一と一りりるを奇絶の地と  
山畑の草ほるあまの法務は 音子  
法務のいしき枝のたのめをよきる  
焼原のや所吹くふる山下は 尺中  
こちり一をくつるを奇絶の地と 揚子

けりん少金おと新たそこまあ  
まゝとれく糖やく畑のくわの山 岩翁  
川草のまてはまのや谷のあ 音子  
一ツをとおくくくくわしたま 音子  
真頃野店無肴核薄酒堪詰テラニ  
豆荚肥タリと固ま家く句ッ感ん  
足あがるまきまよけと新角は 音子  
さすのゆく火を撫くくむのま 尺中  
山つてく目の島の虹川板の経 音子

初彫と論 在原寺

花みちる家の子連くくつせ山 音子  
うらもの杉や根もくろく草のさ みる  
くせ籠りぬの糸やこくく 酒横儿  
けお柴井張くくも谷の繪者 尺中  
大和橋とくくまらりくくまら

泊ぬりく柿のきめくを恐ひくろく音子  
みみくく初彫の下くくさばのむ 松翁  
ゆくくあきく真後く

日の目みせあ味もくくん花が 音子

光の皇后の大御所

虫乃鳥く草くあくく山風の谷 みる  
大佛乃片肌のさあ日のかくろく 尺中  
廿八日南都をさ出くく

い新をく十三時くくくくく 岩翁

光の皇后の奥院

小鳥くくくくくを力めはる山居が音子  
かゆはる美宝什物くくくくく 尺中

小松教信松上へあつてせうし  
松信の硯あり箱の上へて歸と  
あつて世をさへ毎々うんぬの形あり  
いつちかへ似たりけり

松信乃破るや息をくくせり音子  
ニとや志きみけりげ「薦のあきる

多武峯

下場を水色峠のあきる同  
と月戸機とあきる水車 尺神

案内ちかぢあきると輪乃月 岩翁  
むけしとれと霧の辺たるる音子  
下るれをみとるや松の月 松翁  
秋の日のあきるも海と夏乃業 尺孝  
清涼よる松の神や苔のこきる  
あきるはらりや井筒の松丸を 横几  
僧りきりあきるの向ふ屋敷か 音子  
春日四季のなみ人連ぬあきるの  
あきる成り刻を限りけりはるこ

今幾日秋の長旅をけり山音子  
日々山々遊子の灯笼秋のさ 山翁  
御徳彰は猿も菓を運ぶりまぬ  
心く陰あむるや片縄棟横儿  
いずれちかきまへ向ふふとよひを

物み石乃也をの事と志の爲中ぬ  
木の根を竹や小麻の角の除松翁  
二月堂の七日割食たひ者あると

深ゆりいりてり母人声

坊の聖乃古伝あり

づふぬまの控を身を流はくは横儿

廿九日より一乃山あり白き山あり  
重り煙雨谷をくつんて山翁の家  
いんちちんてく西中木を伐れ  
きる木あり小院あり母乃色心  
の底よりくくく小寒を繡磐石と  
いふ自らいひてせし

さるの城乃寒よりより一の山音子

目所より何せきもあまのりた山まゐ  
あまのりたくも日くをまて 横儿  
あまのりたや苔はえ白まのりた 岩翁  
あまのりたや一燈乃真まのりた 尺中  
世きもこのりたすいあまのりた

よまのりた新まのりた  
あまのりたあまのりた

新まのりた見所や九月を 音子  
あまのりたのりた

三尺のりたまのりたのりた 同

あまのりた何目まのりた  
十月二のりた山上世をまのりた  
小まのりた世のりた 岩翁  
あまのりたのりた 尺州  
院をまのりたのりた 亀翁  
あまのりたのりた 同  
あまのりたのりた 横儿  
卯塔のりたのりた 音子

世あみぬの宿中へ

戸をくぐり 楮のつぎをぬれぬ 尺艸

紀の川 いづれもきり  
こゝ月影のそよよき

あつらひ矢をつくぬやみづの月 多子

船路の歌をたしむ世はゆるり 多子

和歌のついで 吟上

なまなこ子なるの末磯をぬ 岩翁

伽羅木をくぐりぬれぬ 横儿

浦の波をぬれぬ 尺艸

わいづらひはなをきけぬ 与男は 多子

玉津島あめりて

片るちぬれぬ 与男は 多子

帰一

和歌のついで 吟上 同

粟島はな

舟ぬり 歌をたしむ世はゆるり 多子

一葉の歌をたしむ世はゆるり 多子

かけぬれぬ 尺艸

るまわらぬのその従者すくわたりき  
つよく力を添くともみけりく

鮎ひらりく魚もく網りけ 音子

あまのふれは魚をすむと

あまのふれは魚をすむと 鮎ひらりく

網をせし鮎もあまをすむと 松翁

網形くわがわ乃浦戸燈はるむ 横儿

くこのふも寒くわが乃燈はるむ 岩翁

網をせしく信何とくく縁物 尺神

住吉奉納

昆布くつどの魚を杖巻のあまの 岩翁

し女子の火流をゆる神樂は 龜翁

あまのし戸燈馬子かゆの帆は 横儿

お船やあまの心流をゆる木形 尺神

草のあまのあまの心流をゆる海 音子

十月十一日芭蕉翁筆

乃くしあまの心流をゆる木形

旅もしあまの心流をゆる木形



此一帖者龜翁旅泊之日記也  
初而有遠遊之志故重父子之  
信合朋友之親長祝於神社  
嘗敬禮佛圖而急曉務槩所  
往所至之幽懷歎不巧之京洛  
歡遊之間多在於酌之暇令  
校合吟了則号隨緣記以而  
以負句兒茅集後 晋子

句兒茅追考六格

○健句

壯肩、牡丹の露や初〜とて 曲翠  
歌々々初々々々々々々々 柴栗  
△月ある石部の山と凡々帯に 松風  
下〜のあまひつあまひつあまひつ 暮子  
地り〜や海濱をさる笠隣 棧一  
繫ぬ〜と心とよもやとちあひ元 山蜂  
一ッ所炎をり〜のゆる〜と 鏗 黄山

わのそく乃氏よもげある 茄よら系 為有

篠て涼りはる系川きまの人 區 思演

傘しそ流るす 雪 礫 孫子

精をそとるひそく 山さく 巴水

西へうー 六条よのほ杜母 許六

中籍や沖の釣場を二百尋 岡指

けりあこ餅のぬきり 餅

淋しよやぬるさ北風の只とをん 山蜂

ちりしやまのわさうくくぬの系 杜若

星深のあきけさう 五月る 野梅

あ〜よひ大はの車園あさえ 介我

馬さう 因た〜み〜火舟う系 岸口

雨をたしやわ〜く 區 松々

う〜ひやや 區 埴 歌吟

あ〜〜〜 琵琶の来る日と初雪と 山子

春の葉〜ひるまのあな 桃都

花さのあみまをや ちみの声 嵐水

花さ〜〜 花をさ出〜る 素牙

除そのくぬきも嬉し盆志り以 朝三  
あまんとつらまほりぐり二番凡 湖月

田月を

はみさゆきしあひめくも田月 芳山  
葉らの白をすくも即ちを 今我  
夕立戸はともよりの眩まくり 寺吟  
はちて蝶を食ま下戸らまくりり 芝筵  
寒菊の内をうかす報子か 湖風  
懸門や穂とくけしゆさう 琴風

○新句

をふくしの思ひけくも 光り系 老尼 松吟  
あふ葉まや白もみまよに中より出 雲袖  
あまらぬや神もはまの白ゆ 秋色  
新假治もまてぬるを舎のやわりか 思演  
あをまきくあまらつるると 郭云 安之  
垣はくもあまらつる紅むのるあは 膳羅  
七夜の社のくもや子指るを 尼 智月  
なほくま蚕あまら カサ 葉のあつるは 許六

白下

七

みのる色 染るも色あはらばのむ 紫取  
 みのる色 染るも色あはらばのむ 紫取  
 葉のんやうきもあつなけ小社の宿 撤士  
 うらねやひよりの河もくつりすこ 彫崇  
 掛物やあはれとほしむの蠅 梅葉

さいごらる  
 まかとうをうきいさや (ヒトエモ) 拙し  
 活産 はこ

御所と成にけしちるこつちる  
 野梅

けつと 町ちよこあひよ 玉中 神叔  
 舟是く小ねしぬるりきおち 一雀  
 帯 袴も川も流きては干し 沾徳  
 寒く花もあつな色あはらばのむ 暮子  
 きのう糸も氣に隈のあつな 桂花  
 灯の志もあつな色あはらばのむ 氷花  
 くるすのたの橋もぬるりきおち 百里  
 くるすのたの橋もぬるりきおち 柳玉  
 くるすのたの橋もぬるりきおち 東水

蓮の葉を 田んぼに付く ありては 沾徳  
うらみあいのついでし さんぽう楚が 神叔

音子 音子と月のついでし 菘の  
名月を 菜名を 二里も 遠く 園指

幻住庵のついでし

石山を 指の はるばる 酒 曲翠  
あつた 押され 並出 継 百里  
あつた 船を 跨の 和加 城 肅山  
あつた やいばを 安房の 舟便 さら

○清句

雨桂芭蕉子のりて 音子  
やあ入のるやも のこきよも 瞞羅  
まんま びつる 紅粉の 此君  
交を 紫蘇の 小梅 秋色  
まじ 鹿忌子 菊の 梅葉  
権佛 やりし 並ある 井戸の 曲翠  
あしや やみの 極く 桑捨  
あつた 碇の な 尚白

肩衣平山のなるむを旅 旂 山川  
 いづくや去ぬる旅ゆくは水 明月  
 捨てまよふ道の堺乃みくもを 許六  
 満ゆく何よりうらんちんを 含棘  
 夕のゆやぬり湯よのち 石尾 角上  
 飛石乃ちやあんのむや乾 介我  
 泥つるを旅あふりゆく 神代  
 元と所しきとをくくるん星紀り 酉花  
 筆やかたの行の跡もくし 氷花

○傳句

懺みくちくくや醫師の紋所 行病  
 音塚をるゆいしゆ守はくゆ 銀杏  
 あら女のもくせくものど川の文 彫棠  
 新集山  
 肩衣くまを歩の機や山 柘 空嵐  
 せいのまも航の新えと字は昏 思演  
 所ちひや指りくまし長酒 木奴  
 新酒の志るも青よゆらんが 酉花

人心のこころはけりしるり凡烟 同指  
 星あしは離れのちを徒くえん 山蜂  
 り灯と煙をあらはれしはの 暮子  
 身を触るくはしあはれをむ 秋臣  
 けつらもよのこゑをきえ衣 思演  
 了るるは 蛭の血ぬくよる苗糸 弥子  
 糸とせもころる女よの 般の髪 松吟  
 鮎切しや世後にも異々いし 葛宗  
 ちのくみあはるもあらんま素肌 夕秋

山をた山椒くすよ火煙は 角上  
 人近お樺のむや村のその 介我  
 ろつまは 時く何所のゆが 千那  
 追くもく 鳴くせりみひを 翠袖  
 ゆよふのこを所くこまりり 堤亭  
 的まのホるや出らんみろの月 去来  
 鑑所  
 観射もちままうくら 城の陰 正秀

白下  
 三上

○麗句

文をそなくはよもあし一糝五把 嵐雪  
 我高乃婉の熟見るつそあは 孤子  
 移名あそいひらん様のらりなり 彫棠  
 里をより火寺袋をかざりし 安之  
 散もや根のせつなびあふ 晨鐘  
 霞を川物をみかたる毒もあふ 新道  
 夢多世貫よ 使子やうてしよせり 黄山  
 川ゆやちきういゆる舟の心 瞞羅

山はくく少舟くゆさつあ模様 野風  
 なてくくこく權のまや笠の内 控ゆ  
 枝もあふ子苗の菊田のこもあ 一雀  
 むらの舟や木瓜を菫のあ合せ 沾徳  
 原の毛く老らうそくく立隠し 彫棠  
 石川や築くつ時のそほほり 批鄰  
 涼み魚の末を遊ゆ 紫取  
 白魚やみかあそく 拙ゆ  
 房少や星のこあそくあ 素牙

白下



石竹の移りゆくはゆめ多しの月世  
暮れゆく人あそびたり蔓くさり 山川  
細川の流るるを蜚りし我の面 一雀  
ゆするもを遊ぶと猿と鶴とつら 彫棠  
流るる水も身をすくえ入るは正確 思演  
名月ありはらりや柿の刻るはと 角上  
池入 象形も白牡丹 柳玉  
蓮のまゆ衣裳ありはらりしは 虎琴  
藤の家は打兵衛と長月ありは 未陌

る士のゆへに懸あつては者りふ 松吟  
鏗もあつては時のかきといひは 次へはつてはなり  
日比ある門をさしあつては念佛 介我

病中吟

名譽や海へしるるは観望 山川  
古楽を海へしるるは鈴乃森 拙以  
阿茶房やのこる魚はかき 花梅  
名くはあの新なる西瓜り 一江  
川越や蚤をわらうは横田川 彫棠

涼ら小我々をゆきせぬ子さし 野風  
角巻てはのこぼれはあやも子 一境  
うつく日を濛あけはる園のな 思演  
唯所也物あはれあふ粧ひ新 節水  
あらさのやと島を海を山つよ 野梅

舞中

妙をあらとあをせらあはる女は 拙の  
舟漕中先小をつるく世あはる 戸牧  
かきこもく時をたあはるく刈粒は 杉風

豪句

六月何家子とををわし山 芭蕉  
あはしとを干川の船乃舎の字 湖夕  
卯のもよ芦毛乃るれあめあふ 許六  
山鳥の尾子尻くくやあまのまれ 曲翠  
あまなうらうらほくく柳のれ 野梅  
すくくくく 筆難のまらぬ 湖風  
母の墓子あはる  
家新やうらうと祝く荷のあ 秋色

初冬存良の積りよと見しおをま 松吟  
 一節乃乳の毛戸命あまの舟 湖風  
 四つわのつ井一箇の雪あ仲のあま 其詞  
 故を説き蘭の伽答る白くま 口遊  
 ひくまや暑い盛も花乃後 含棘  
 二十のお乃たもこ戸 鯉舟 徹士  
 氣さるさるいさへいさへ山さる 寒玉  
 わさし舟船賃をさる涼さる 白盆  
 夜所の水をあせりし 猿の素 彫棠

老人の漆のうらや 智涼を 神意  
 門さるをを遊すふさる 鯉 泥足  
 少くらの目やこさるあまの舟 寺吟  
 出るをまあはみさるあまの舟 介戎  
 貝うをさるあまの舟さるあまの舟 彫棠  
 應しくさるを敲くや雪の門 去来

人どりく得を致するありし雲と  
凌ぎ水よのそとほろし眼前に旋ひ  
幽妙と探る志は等しけりさ致と  
向ふとふく是と人海はあつぬ工なる  
と此は是下はけし玉紙指を原とく  
心と穿ら海より入ふ又その中よりを  
るくきとねよもの安く目よんて  
形求りんと此を備へて拾いさる人

行<sup>キ</sup>當<sup>ル</sup>こゝに是に原詩本歌の要  
と見えし一宵と改むといく<sup>テ</sup>彷彿<sup>ト</sup>  
子<sup>ノ</sup>病<sup>ニ</sup>一度<sup>ニ</sup>花<sup>ト</sup>しよと彷彿<sup>ト</sup>子<sup>ノ</sup>色<sup>ト</sup>  
一葉<sup>ニ</sup>花<sup>ト</sup>といひ果<sup>ニ</sup>徹<sup>ル</sup>林<sup>下</sup>何<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>  
一人<sup>ト</sup>といふよまた<sup>テ</sup>登<sup>ル</sup>寺<sup>ニ</sup>出<sup>テ</sup>得<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>  
地<sup>ニ</sup>誰<sup>カ</sup>一人<sup>ノ</sup>勇<sup>ム</sup>向<sup>テ</sup>中<sup>ノ</sup>の深<sup>ク</sup>居<sup>ル</sup>者<sup>ト</sup>  
端<sup>リ</sup>り<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の愛<sup>サ</sup>も<sup>ト</sup>魚<sup>ト</sup>又<sup>ト</sup>こゝろ<sup>ノ</sup>又<sup>ト</sup>  
ふまゝに<sup>テ</sup>行<sup>ハ</sup>や<sup>ら</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>リ</sup>

志<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>の浦<sup>ニ</sup>舟<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>ル</sup>に志<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>や  
遠<sup>ク</sup>行<sup>ハ</sup>り<sup>テ</sup>行<sup>ハ</sup>は<sup>ら</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>案<sup>ズ</sup>る<sup>ル</sup>出<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>リ</sup>  
月<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>遠<sup>ク</sup>陸<sup>上</sup>の<sup>ノ</sup>舟<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>是<sup>レ</sup>今<sup>ノ</sup>神<sup>祠</sup>  
代<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>來<sup>リ</sup>て<sup>ト</sup>風<sup>ヲ</sup>神<sup>ト</sup>とい<sup>は</sup>れ<sup>ル</sup>  
物<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>又<sup>ト</sup>左<sup>ノ</sup>原<sup>ニ</sup>交<sup>ハ</sup>す<sup>ル</sup>に<sup>テ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>る<sup>ル</sup>田<sup>ノ</sup>の<sup>リ</sup>  
志<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>舟<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>舟<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>舟<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>舟<sup>ト</sup>  
後<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>テ</sup>救<sup>フ</sup>業<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>此<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>舟<sup>ト</sup>  
は<sup>レ</sup>こゝの<sup>ノ</sup>曲<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>境<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>舟<sup>ト</sup>

夕乃從撲傾倒自侍のくすくす  
ゆゑに物來一しよよとせ  
たまゆさの中将の孫子音子こと十  
九人此連枝也兄とていふ句と  
ほく歩る乃一はあそびとていふ  
とていふとほくくは徳記

東寺町二条上町  
井筒屋庄松板

